

第2節 富士山かぐや姫ミュージアム所蔵頭椎大刀について

豊島 直博

はじめに

本稿では富士山かぐや姫ミュージアムに収蔵されている頭椎大刀について報告する。頭椎大刀は鉄本体が残存せず、把頭金具（第228図1）、鳩目金具2点（同4・5）、切羽金具（同2）、切羽縁金具（同3）、鰐（同6）、鉤（同7）、足金具2点（同8・9）、責金具（同10）、鞘口金具（同11）、鞘尻金具（同12）、把間に巻かれた銀線（第229・230図）がある。これらは同一個体の頭椎大刀を構成する部品として違和感はない。以下、各部品について詳述する。

1 各部品の報告

把頭金具（1） 金銅製で卵形を呈する。長径7.0 cm、残存する短径4.5 cmで、筆者の分類では小型に属する（豊島2019）。天井部と、片面の鳩目穴付近を一部欠損する。半球状の部品を二枚合わせにした痕跡が認められる。把間側には長径3.2 cm、短径2.1 cmの卵形の穴をあけ、切羽と接する部分には平坦面をもたない。片面に3本の畦目をもつ。桜井達彦の分類では堅畝Ⅰ式（桜井1987）、筆者の分類では畦目Ⅱ式に相当する。

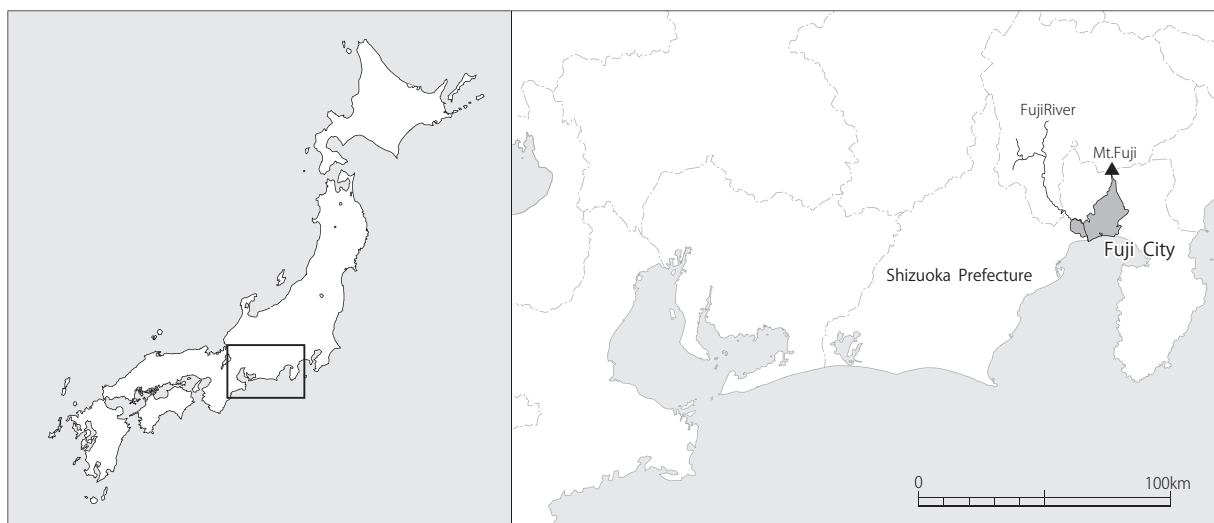
鳩目金具（4・5） 把頭に両側からはめる鳩目金具が2点ある。いずれも筒状品の片側端部を肥厚させ

て頭部とし、頭部にはわずかに鍍金が残る。4は頭部の直径1.1 cm、全長1.1 cmで、筆者分類の小型短脚式に当たる。側面には銅板を筒状に折り曲げた際の接合線が見える。5は頭部の直径1.0 cm、全長1.1 cmで、小型短脚式に当たる。頭部は筒状部と若干の角度をもって取り付け。脚部の側面に銅板の接合線が見える。

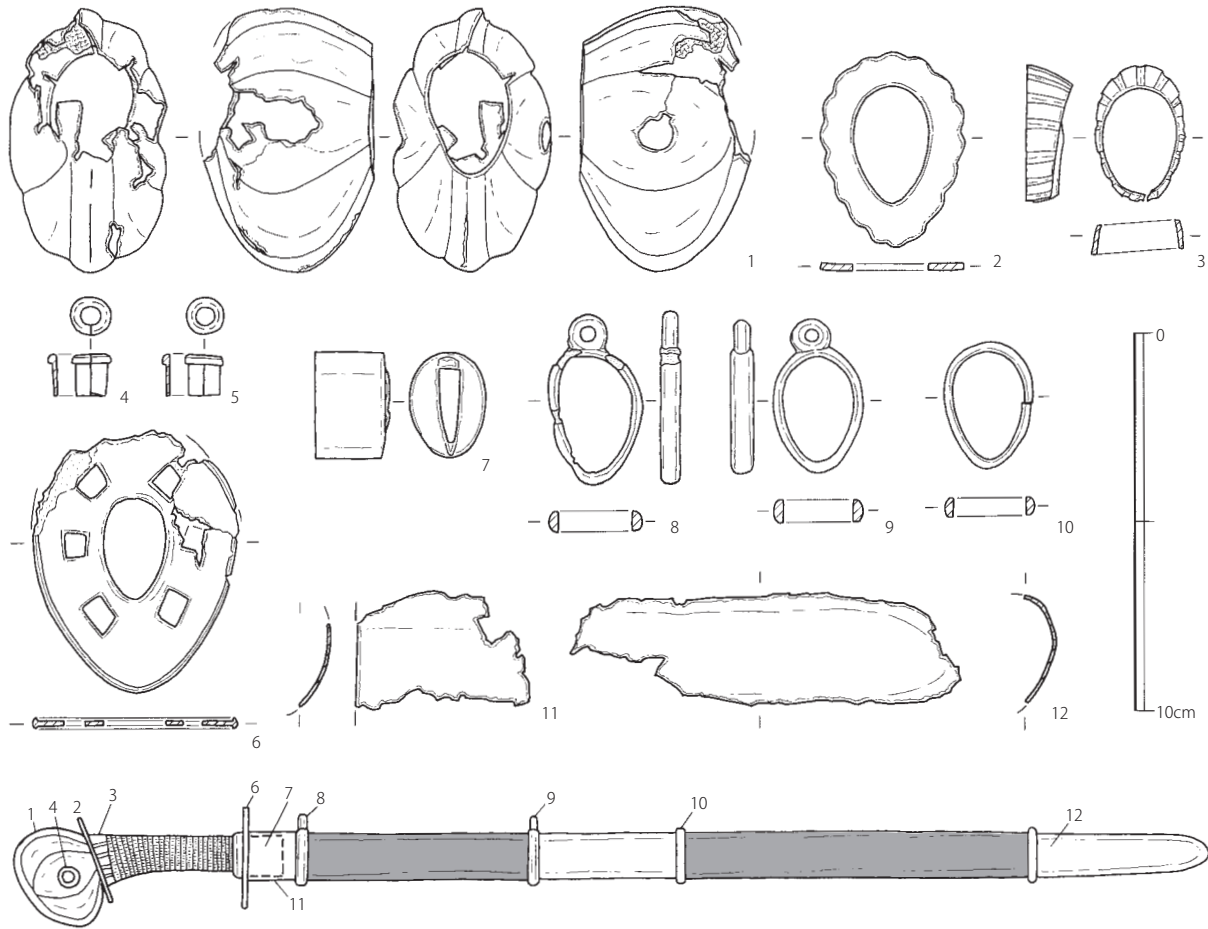
切羽金具（2） 金銅製で、卵形の環状品である。長径5.2 cm、短径3.8 cm、内孔の長径3.1 cm、短径2.0 cm、厚さ0.2 cmである。全体にわずかな反りをもつ。外側を波状に加工する。

切羽縁金具（3） 金銅製で、卵形の石鉋状を呈する。長径3.6 cm、短径2.4 cm、最大幅1.2 cm、最小幅0.7 cmである。環の一部が破損して途切れ、左右で段差が生じている。外面には幅0.2～0.3 cm程度の沈線が13本入る。

鰐（6） 金銅製で、卵形を呈する。外縁の一部を欠損し、残存長6.9 cm、残存幅5.4 cm、内孔の長径2.7 cm、短径1.6 cmである。板状部の厚さ0.2 cm、縁の厚さ0.4 cmで、外縁を肥厚させる。肥厚部分が別造りの蟬付けであるか、叩き出し等によるものかは、観察のみでは判別できない。長方形および台形の透孔が6カ所あけられている。



第227図 静岡県富士市の位置



第 228 図 富士山かぐや姫ミュージアム所蔵頭椎大刀装具と復元図



第 229 図 把間の銀線



第 230 図 銀線の細部

鍔 (7) 金銅製で、卵形の筒状を呈し、片面を板状部材で塞ぐ。長径 2.8 cm、短径 2.0 cm、幅 1.8 cm である。板状部材には鉄刀の茎を通す切り込みが入り、その長さは 1.9 cm、背側の幅は 0.6 cm である。また、切り込みの上下付近には刀身の形を反映した凹みがあり、鉄刀本体が両関の刀であったことを示す。

足金具 (8・9) 金銅製の単脚足金具が 2 点ある。8 は刀身部分の錆化による変形が認められる。長径 3.6 cm、短径 2.5 cm、幅 0.5 cm の卵形の環に、径 0.8 ～ 1.0 cm の小環が付く。小環の位置はわずかに中軸線から偏る。

9 は長径 3.3 cm、短径 2.4 cm、幅 0.6 cm の卵形の環に、

径 0.8 ～ 1.1 cm の小環が付く。小環の幅は 0.4 cm で、環との間に段差が生じている。小環の位置は、8 よりも斜めに偏る。

責金具 (10) 金銅製の責金具が 1 点ある。環の一部が断裂しているが、長径 3.4 cm、短径 2.3 cm、幅 0.5 cm である。断面形は厚さ 0.3 cm の蒲鉾形を呈する。

鞘口金具 (11) 金銅製の筒状品の一部があり、鞘口金具の破片と考えられる。鞘間金具の可能性もあるが、内面に木質が付着していないことから、鞘口金具と推定する。一方の端部がわずかに残存している。残存長 4.6 cm、最大幅 3.1 cm である。

鞘尻金具 (12) 金銅製の筒状品の一部があり、片側がすばまる形態から、鞘尻金具と考えられる。蟹目釘を伴う筒状の鞘尻金具ではなく、円頭状に閉じる鞘尻金具であろう。残存長 10.3 cm、最大幅 3.0 cm である。内面に鞘の木質が付着する。

把間の銀線 以上の部品以外に、把間に巻かれていた銀線の塊がある。幅 0.2 cm で、中央に稜線をもち、緊密に刻み目を入れる。稜線を挟む両側の刻み目は間隔が一致しており、先端 V 字形の鑿で刻まれたと考えられる (大谷 2012)。

2 資料の評価

最後に、本資料について若干の評価を試みたい。

全体像 本例は、把頭金具の把間側にあけられた穴、切羽金具の内孔、切羽縁金具の内孔の法量がほぼ一致する。また、いずれの部品も頭椎大刀としては小型であり、同一個体の部品とみて違和感はない。不足する部品は鐔の把間側に付く鐔縁金具、鞘間金具、責金具 1 点であろう。把間の銀線巻きについては、短脚畦目Ⅱ式で確認できた例はないが、同時期の短脚無畦目式では茨城県風返稻荷山古墳例 (千葉編 2000)、千葉県殿塚古墳例 (滝口 1956) で類例があるので、ひとまず同一個体とみておきたい。

なお、鞘飾金具と鞘包金具が 1 点も出土しておらず、本例の鞘は黒漆塗りを基調とする準素鞘であったと考えられる (滝瀬 1984)。第 228 図の復元図は以上をもとに作成した。

年代と意義 本例は、従来の新納泉の分類と編年によれば最新型式の V 式に位置づけられ、暦年代は 7 世紀初頭頃となる (新納 1987)。近年の筆者の分類

では短脚畦目Ⅱ式に位置づけられ、暦年代は 7 世紀第Ⅰ四半期である。

短脚畦目Ⅱ式の頭椎大刀は、物部守屋の滅亡により、生産体制が蘇我氏に接収された後の段階のものと筆者は理解している。なお、富士市内では愛鷹山南西麓の須津で双龍環頭把頭が出土している。筆者分類の内向Ⅳ式に位置づけられ、年代は本稿で報告した頭椎大刀と一致する。残念ながら頭椎大刀の出土地は明らかではないが、7 世紀前葉に富士地域に蘇我氏が進出したことを示している。

いっぽう、富士市では花川戸 4 号墳 (佐藤 2013)、中里大久保 K95 号墳 (植松編 1975)、伝法国久保古墳 (藤村ほか 2011) で圭頭大刀が出土している。また、東京国立博物館には富士郡出土圭頭大刀把頭があり、圭頭大刀が多い地域といえる。その背景を探るには、圭頭大刀の分類と編年を早急に確立する必要がある。

参考文献

- 植松 章八編 1975『中里大久保 (K 第 95 号) 古墳 付載 K 第 97・98・99 号墳の副葬品』富士市教育委員会
- 大谷 晃二 2012「金鈴塚古墳の金銀装大刀はどこで作られたか？」稲葉 昭智編『金鈴塚古墳展一甕る東国古墳文化の至宝一』木更津市郷土博物館金のすず 18 - 23 頁
- 桜井 達彦 1987「頭椎大刀の編年に関する一考察」増田 精一編『比較考古学試論一筑波大学創立十周年記念考古学論集一』雄山閣出版 171 - 189 頁
- 佐藤 祐樹 2013「富士岡 1 古墳群の調査」佐藤 祐樹・若林 美希編『富士市内遺跡発掘調査報告書—平成 22・23 年度—』富士市教育委員会
- 滝口 宏 1956「千葉県芝山古墳群調査速報」『古代』第 19・20 合併号 早稲田大学考古学会 49 - 64 頁
- 滝瀬 芳之 1984「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会 5 - 40 頁
- 千葉 隆司編 2000『風返稻荷山古墳』霞ヶ浦町教育委員会
- 豊島 直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第 102 巻第 1 号 日本考古学会 77 - 121 頁
- 新納 泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第 34 巻第 3 号 考古学研究会 47 - 64 頁
- 藤村 翔ほか 2011「伝法 国久保古墳の調査」藤村 翔・若林 美希編『平成 13 年度 富士市内遺跡・伝法 国久保古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会